



三年名作「七人の侍」の縁の下

テレビの出現とともに、映画が斜陽の道に追い込まれたのは確かである。

が、映画の初期、無声映画時代には、映画は「活動写真」と呼ばれていかにも活気があった。しかし技術的には、あたかも田舎芝居をただフィルムに収めただけのような、なんとも泥くさいものが多かった。監督も教養や学識などはそっちのけ、ただ映画への情熱だけが取りえといった御仁が多く、たとえば瀕死の病人がいて、その枕元で医者が神妙な顔で脈をとっている。ついでシーンが変わると、豊だけの大写しの画面にスプーンが一つ、ころっとほうり出され、これで病人が息をひきとったという暗示。

つまり「医者がサジを投げた」というわけである。それでもその監督さんは大まじめ、気のきいた「演出」をしたつもりだったというから憎めない。

そこへいくと、戦後の名作のひとつに数えられる黒沢明監督の「七人の侍」などは、ストーリーから演出まで映画作りのすべてのツボを押さえた見事な娯楽編で、それだけに製作にまつわるエピソードにも事欠かなかった。

「七人の侍」は、娯楽映画としては常識外れともいえる三年もの日数をかけた大作だったが、じつはこの映画の製作期間中、明けても暮れてもカツ丼を食べ続けた男がいたのである。

「七人の侍」の出演者の一人で、個性俳優として知られる宮口精二さんがその人。そのころ東京・世田谷にあった東宝の砧撮影所では、昼飯は撮影所の前にあった町の食堂で食べるのが日課だった。宮口さんもその常連の一人だったが、毎日のこととなると「本日できますものは、のメニューの中からいちいち選んで食べるのが面倒になり、ある日、決然と『わたしの食べますものはカツ丼一本』と決めてしまったのである。

そのうち、店の者も、この毎日毎日カツ丼を注文する奇妙な客に気づき、ある日、半分は好奇心も交えて「失礼ですが、よほどカツ丼がお好きなのですね」とたずねると、宮口さん、苦笑まじりに「いやあ、毎日あれこれ考えるのが面倒なもので……」と頭をかいたという。

このやりとりを近くで見ていた、これもまた日本の映画史に残る名監督の一人、山本嘉次郎さんが、さっそく「これがほんとのカツドン（カツドウ）役者だ」としゃれのめしたというが、宮口さんは、昼ばかりか夜もカツ丼……。

これを三年間も押し通したというから、まさしく相当な「ザムライ」だったのである。